



若者へのメッセージ 57

フリーアナウンサー 藤井 康生

【第一回】大相撲との出会いは祖父の胡坐の中

祖父は大相撲好きで、大相撲がテレビで中継されるようになるのが家も早速テレビを買った。私は祖父と一緒に大相撲をみて育ち、その後縁あって日本放送協会（NHK）に就職すると、スポーツアナウンサーとしての道を選び、やがて大相撲中継に長く携わることとなる。

祖父との相撲観戦

昭和30年代、テレビジョンというものが世の中に広まり始めます。私が生まれた頃、一般家庭にも徐々に普及しつつありました。

昭和35年のある日、我が家にもテレビがやって来ます。当時、父母に加えて祖父母も同居していました。祖父は大の相撲好きで、昭和の初めからラジオで大相撲中継を聴いていました。ですから、テレビで大相撲を観ることができると知った時、すぐに近所の電器店に駆け込んだ

そうです。それから幾日かが経った頃、決して裕福とは言えない我が家に、その時代の最先端を行く機器が入りました。

大相撲の期間中、夕方になると祖父はテレビの前から動きません。私は、その胡坐の中にちょこんと座り、画面に釘付けになっていました。大相撲に興味を持ち、夢中になるまでには、さほどの時間はかからなかったようです。

時は「栃若時代」が終わりを告げ、横綱は若乃花と朝汐（のちの朝潮）でした。そこに、柏戸や大鵬が脚光を浴び始めていました。



藤井 康生（ふじい・やすお）

フリーアナウンサー（元日本放送協会（NHK）エグゼクティブアナウンサー）
公益財団法人日本相撲協会記者クラブ会友、JRA日本中央競馬会記者クラブ会友。
昭和32年（1957）1月7日生まれ、岡山県倉敷市出身。岡山朝日高校、中央大学法学部卒業。
昭和54年（1979）4月1日、日本放送協会（NHK）入局、東京や大阪のほか全国の各放送局に勤務。
令和4年（2022）1月31日、NHKを定年退職。
令和4年3月17日、株式会社17（ワンセブン）設立。委託契約フリーアナウンサー。
令和4年3月、ABEMA大相撲LIVEで実況担当。
令和4年4月、YouTubeチャンネル「藤井康生のうっちゃり大相撲」を開設。
令和4年5月1日、令和7年3月31日、学校法人大阪学院大学特任教授。
NHKアナウンサーとして43年間、おもにスポーツ放送（大相撲、競馬、水泳など約30種）を担当。現在（令和4年3月）は「ABEMA大相撲LIVE」で実況担当。
《大相撲》は昭和59年（1984）名古屋場所から約38年間担当（ABEMAでは5年目）。
平成13年夏場所千秋楽、貴乃花が膝を脱臼しながら武蔵丸に勝ち鬼の形相となった一番や、平成20年初場所千秋楽、朝青龍と白鵬の両横綱による大熱戦など数々の名勝負を実況。
《CM》映画「ドラマなど」
Netflix「サンクチュアリ―聖域―」での大相撲実況。声の出演（令和5年5月4日）
映画「ルノワール」での競馬実況。声の出演（令和7年6月20日）
「アイ工務店」CMのナレーター。声の出演（令和5年11月5日）
「サントリーBOSST大相撲コラボ」WEB動画実況ナレーター（令和8年2月3日）など。
《著書》「土俵の魅力と秘話」（発行 株式会社東京ニュース通信社）（令和7年3月）
「粹北の富士勝昭が遺した言葉と時代」（発行 株式会社集英社）（令和7年11月）

祖父が月に一度の病院に行く時には、必ずついて行きました。帰りに買ってもらう土産は相撲の雑誌です。家に帰り着くのが待ちきれず、バスの中でその雑誌をむさぼるように見ていたと祖父から聞きました。

まさか、その頃から大相撲中継のアナウンサーになることなど、考えてもいなかったはずですが、しかし、いくつになっても、大相撲への興味が萎むことはありませんでした。

大相撲中継の担当になる

祖父の胡坐の中から、20年近くが経過した昭和54年4月、NHKに就職します。その数年後、自らの希望で大相撲中継の仕事に関わるようになった時、幼い頃からの祖父との時間が少なくならず役に立ちました。大相撲の専門用語や決まり手、さらに歴史やしきたりなど、興味の中で得た基礎知識が、中継放送への入門を比較的内容易なものにしてくれました。



大相撲中継を始めた頃の筆者

生業なりわいとして大相撲の世界に入ると、子どもの頃から観てきた力士や親方と面と向かって話ができるという夢のような時間になりました。かつて、テレビ画面の中でしか会えなかった人たちから、直接話を聞くことができるのです。関心を持たせてくれた力士や親方が、実際にはどんな人なのか、あの時の勝負はどんな思いだったのか、当時の放送だけでは知り得なかった情報を得ることも可能になります。そして、新しい発見にもつながり、さらに興味は尽きなくなるのです。

興味や関心のあることを職業にする幸せは、ありきたりな言葉では語り尽くせません。その物事を深めていけば自分の仕事に活かされます。調べることや蓄積することが苦にならなくなってきました。そこには、生きるための報酬を得ることから距離を置いた「仕事に没頭できる幸福」があります。

スポーツアナウンサーの道を歩む

NHKという組織で43年間、スポーツ中継を中心にアナウンサーを務めました。アナウンサーの仕事も多岐にわたります。ある程度は、自身の希望で専門分野を探ることはできます。私は、入局が決まった時からスポーツアナウンサーの道を進みたいと言い続けてきました。大

相撲はもちろんですが、野球、サッカー、ラグビー、陸上競技に水泳、競馬、競輪、ときには近代五種からなぎなたまで、数えてみるとおよそ30種の競技の中継を担当してきました。

いずれの競技も、超一流のアスリートが目の前にいます。そのパフォーマンスをテレビで観たりラジオで聴いたりする人たちに伝えるやりがいのある仕事です。オリンピックの舞台に行けば、自分自身是世界最高峰のプレーを特等席で無料観戦できるわけです。もちろんマイクを通して、その感動や興奮を視聴（聴取）する皆さんに伝える任務があります。それでもスポーツ好きからすればこの上ない幸せです。

何よりもスポーツ中継には、用意された原稿や台本がほとんど存在しません。つまり、その瞬間瞬間を自分自身の言葉で伝える、そこに魅力を感じながら歩んできた43年間でした。おかげで、NHKを定年退職した後もインタナーネットテレビ「ABEMA」で大相撲中継を担当し、今も大相撲の世界との関わりを持っています。

人生は一度です。自分自身が興味を持ち続けられるものがあるのか、没頭できるものがあるのか、仕事と考えた時に苦にならないものがあるのか、若いうちに立ち止まって探ってみることも必要です。それが見つかった時、満足できる人生に近づきます。